

園藝文化

八十周年紀念號



No.133

CONTENTS

園芸文化 October 2024 No.133

創立 80 年に寄せて	長岡 求 (ながおか・もとむ)	1
年表・協会八十年のあゆみ (1926～2014年)		2
年表・協会八十年のあゆみ (2015～2024年)	園芸文化協会 事務局・編	4
令和六年度 園芸文化賞 ラナンキュラスとともに	草野 修一 (くさの・しゅういち)	6
令和六年度 園芸文化賞 ヒマワリの育種	羽毛田 智明 (はけた・ともあき)	8
令和六年度 園芸文化賞 園芸文化賞を受賞して	羽田 光一 (はた・こういち)	10
2027年国際園芸博覧会 (GREEN × EXPO 2027)	公益社団法人 国際園芸博覧会協会 機運醸成部	12
アーカイブ 会報発刊に際して (創刊第1号)	島津 忠重 (しまづ・ただしげ)	13
事務局より (協会案内)	園芸文化協会事務局	13
園芸文化の歴史図書館	園芸文化協会 編集委員会・編 [裏表紙]	

表紙解説

カトレア パープラータ フォルマ カーネア
Cattleya purpurata fma. *carnea*

ブラジルの南東部海岸地帯を原産地とするカトレアの原種です。1855年にヨーロッパの園芸雑誌に発表された非常に古くから知られるカトレアの一つです。原産地では樹木や岩に着生し強い日射しと海からの風に一年中当たりながら生育し11月頃に開花します。カトレアとしては珍しく海岸沿いの低い標高に自生する種です。パープラータには濃赤紫や青紫色などさまざまな色彩があり、このリップがピンク色のカーネアと呼ばれるタイプは日本で最も人気のある色彩です。多くのカトレア交配種の親としても使われてきている原種です。

カトレアとしては比較的低温に強い原種で、栽培しやすく良く咲く花としても知られています。日本では6月前後を中心とした初夏に3～5輪の大輪花を咲かせます。

撮影日 2009年 6月 10日

撮影場所 千葉県市川市 須和田農園内

撮影者 江尻宗一



『園芸文化』表紙の題字は、云倉院に架蔵されている聖武天皇自筆文書『聖武天皇宸翰雜集』（一万八千字にも及ぶ長巻）より、当協会理事の小笠原誓氏が「園」「芸」「文」「化」の四字を見つけて出し、それらを集字したものです。



8代目会長 長岡 求

創立 80 年に寄せて

公益社団法人園芸文化協会

会長 長岡 求

寒冷の候、当協会会員、賛助会員、並びに関係各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃は当協会運営に対し、ご支援お引立を賜り誠に有難く心より御礼を申し上げます。

さて、当協会は、第二次世界大戦の真っ只中、しかも戦況日々悪化する中、昭和19年(1944)3月に創立され、以来令和6年(2024)をもちまして80周年を迎えることと相成りました。戦争と相反するよう思える花、そして「文化」というものに価値を見出し、その普及のためにこの協会がスタートしています。

当協会の初代会長は島津忠重侯爵です。以来、園芸界における重鎮といわれる人たちが会長に立ち、80年という長い歴史を繋いできました。その歴史ある当協会の会長を仰せつかったのはこの6月の総会でした。はたして、私のような者が会長になってよいのだろうか悩みました。同時に、これまで漠然と認識していた「園芸文化」がどんなもので、今まで継承されてきた当協会の存在意義はどんなところにあるのか等々、まじめに考えました。

その答えは未だまとまっていませんが、幾つか、確かなことがあります。例えば、園芸文化の発展を支えてきたのはヒトと植物、情報です。ヒトと植物が関わりあうとき、その植物には特別な価値が生まれます。日本人の生活習慣や心情と共振して、広く共有される植物観が形成され、また飾り方などに様式(フォーマット)が形成されたりします。江戸時代に発展した伝統園芸植物によく見られることです。

当協会ではセミナーなどを通して、園芸文化に関する情報発信に努めてきました。また、昨今は「園芸文化を育んだ植物たち」という視点からセミナーを企画、実施しています。さらに、園芸文化の根源にある植物も重要だと考え、店頭に並ぶことが少ない、入手困難な種類を含めて、その頒布を新たな事業としてスタートしようと計画しています。情報だけでなくモノも提供することが園芸文化の継承につながり、何よりも最高の会員サービスになると考えたのです。

創立80周年を迎える節目の年を迎え、次の90周年、100周年を目指して悪あがきしなければならぬ、これが私の抱負となりますが、私ひとりでは出来ることは限られています。理事とともに知恵を出し合い、協会の運営に当たりたいと考えております。つきましては、多くの会員や賛助会員の一層のお引立、お力添えを賜るようお願いを申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

末筆となりましたが、会員並びに関係各位のご多幸を祈り上げます。

敬白

令和6年 初冬



第32回 花の文化展
平成7年(1995)4月・日本橋三越本店にて開催。
初日には皇室の方が毎年ご来臨されていた。右端から、高円宮ご夫妻、光藤タカ子理事(当時)とともにご案内する長岡求理事(現会長)



⑤ 第1回 花の文化展



④「季節の園芸」(日本テレビ)撮影風景



(みどりの図書館 東京グリーンアーカイブス所蔵)



①花卉同好会品評会 (日本橋三越本店にて)

西暦 和暦 出来事 *画像あり

年表・協会八十年のあゆみ (1926~2014年)

一九二六 大正15年 「花卉同好会」設立(帝國愛蘭会の会員有志による洋ラン以外の花卉全般にわたっての同好会) 会長は島津忠重公爵

一九二七 昭和2年 東京日本橋三越本店にて「第一回陳列会」を開催

それ以降、春秋年二回、日本橋三越本店または華族会館で開催 *写真①

一九四四 昭和19年 三月一日 文部省管轄社団法人園芸文化協会認可。初代会長に島津忠重公爵が就任

一九四六 昭和21年 日比谷公園内にガーデンビューローを開設 *写真②

一九四七 昭和22年 「紅筋ヤマユリ」をモチーフとした協会のオリジナルメダルを制作 *写真③

一九四八 昭和23年 協会誌『園芸文化』第1号を発行

しかし発行後すぐにGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の忌避に触れ、没収される

一九五四 昭和29年 初のテレビ園芸番組「季節の園芸」(日本テレビ)を企画・出演 *写真④

一九五九 昭和34年 第一回花の文化展「皇太子御結婚記念慶祝」を開催(於日本橋三越本店) *写真⑤

一九六〇 昭和35年 『花卉園芸年鑑』を発行 *写真⑥

一九六八 昭和43年 二代目会長に石田博英氏が就任

一九七二 昭和47年 「フロリアード・アムステルダム1972」に参加・植物提供 *写真⑦

一九七四 昭和49年 『園芸文化』第50号を発行 *写真⑧

一九七七 昭和52年 「園芸文化賞」を創設

一九八二 昭和57年 タイ国100年祭にサクラほか花卉を贈呈

一九八三 昭和58年 「園芸文化展'83」(初回)を開催(於新宿御苑) *写真⑨・⑩

一九八七 昭和62年 三代目会長に原文兵衛氏が就任

一九八八 昭和63年 『園芸文化』創刊100号記念号を発行 *写真⑪

一九九〇 平成2年 「国際花と緑の博覧会」(略称:花の万博EXPO'90)に出展



③協会のオリジナルメダル。作者は朝倉文夫氏



①『園芸文化』創刊100号記念号



⑧『園芸文化』第50号



⑥『花卉園芸年鑑』(昭和35~40年)



⑫創立50周年記念祝賀会を開催(高円宮ご夫妻をお迎えして)



⑩「園芸文化展'91」会場の様子



⑨「園芸文化展'83」オープニングセレモニーには佐藤寛子元総理大臣令夫人(左から2人目)も参列



⑦「フロリアード・アムステルダム1972」でのハナショウブ展示



② 66年ぶりに復刻した『園芸文化』第1号。GHQによって没収日が書き込まれている



⑬新宿御苑菊花壇展観菊会 (新宿御苑)



⑭新宿御苑花市場 (新宿御苑インフォメーションセンター前)



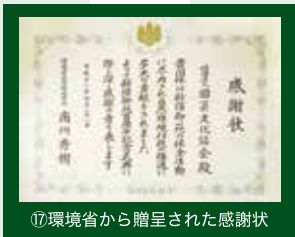
⑮実践ガーデニング講座 (講義と専用園地で学ぶ本格的講座)



⑯秋季・花き展示会 (新宿御苑)

- 一九九三 平成5年 第30回花の文化展「慶祝・皇太子殿下・雅子様ご婚約 花は語る・いまも 未来も」を開催
- 一九九四 平成6年 創立50周年記念講演会・記念祝賀会を開催 (於日本橋三越本店) *写真⑫
- 「第一回新花コンテスト」を開催
- 一九九六 平成8年 四代目会長に福原義春氏が就任
- 一九九七 平成9年 「園芸文化展」を受け継ぎ、「秋季・花き展示会」(初回)を開催 (於新宿御苑) *写真⑬
- 二〇〇〇 平成12年 「実践ガーデニング講座」を開講 (於恵泉女学園園芸短期大学) *写真⑭
- 二〇〇三 平成15年 新宿御苑インフォメーションセンター前にて「新宿御苑花市場」を開始 *写真⑮
- 二〇〇四 平成16年 創立60周年を迎える
- 五代目会長に保坂三蔵氏が就任。「新宿御苑菊花壇展観菊会」を開始 *写真⑯
- 二〇〇五 平成17年 「2005日本フラワー&ガーデンショウ」(社団法人日本家庭園芸普及協会主催)に参加
- 二〇〇六 平成18年 環境省より新宿御苑開園100年にあたり、自然環境の保全と新宿御苑の発展に尽力したとして感謝状が贈呈される *写真⑰
- 二〇〇七 平成19年 日比谷公園バラ花壇管理ボランティア「日比谷ローズ」の活動を開始 *写真⑱
- 二〇〇八 平成20年 『月刊グリーン情報』(株グリーン情報刊)にて連載「TARAYOU (多羅葉)」を開始 *写真⑲
- 二〇一〇 平成22年 「東京インターナショナルフラワー&ガーデンショウ2010」(於国営昭和記念公園)、「日本園芸フェスティバル」(於さいたまスーパーアリーナ)に参加 *写真⑳
- 二〇二二 平成24年 第29回全国都市緑化フェアTOKYOに参加
- 恩賜上野公園不忍池畔に於いて「不忍池と蓮の文化展」を開催 *写真㉑
- 二〇二三 平成25年 「不忍池早朝観蓮会」開催。半世紀ぶりにこの地での観蓮会を復活させる
- 二〇二四 平成26年 創立70周年を迎える。四月一日付で公益社団法人に移行GHQに没収されていた『園芸文化』第1号を66年ぶりに復刻 *写真㉒
- 「創立70周年・公益社団法人移行祝賀会」を開催 *写真㉓

*2015年以降は次ページへ



⑰環境省から贈呈された感謝状



⑲『月刊グリーン情報』にて「TARAYOU (多羅葉)」連載



㉓創立70周年記念・公益社団法人移行祝賀会。来賓の安倍昭恵氏と新花コンテスト受賞者との記念撮影



㉑「不忍池と蓮の文化展」(恩賜上野公園・不忍池畔)



㉒日本園芸フェスティバルにて「江戸で開花した園芸文化」と題して展示 (さいたまスーパーアリーナ)



⑱日比谷公園バラ管理ボランティア「日比谷ローズ」



④「未来につなぐ朝顔文化～歴史と鑑賞」
(日比谷図書文化館コンベンションホール)



③小笠原会長就任記念講演
「世界に誇る江戸の園芸」(国際文化会館)



②新宿御苑菊花展観菊会 2016



①園芸文化賞受賞者による記念講演。
写真は平成29年度受賞の安藤敏夫氏

年表・協会八十年のあゆみ (2015～2024年)

西暦 和暦 出来事 *画像あり

二〇二五 平成27年 「園芸文化賞受賞者による記念講演」を開始 *写真①

二〇二六 平成28年 六代目会長に小笠原左衛門尉亮軒氏が就任

『マイガーデン』(株マルモ出版)にて連載「園芸文化をつくったひとたち」を開始

「新宿御苑菊花展観菊会2016」を開催。通回10回を迎える *写真②

二〇二七 平成29年 小笠原会長就任記念講演「世界に誇る江戸の園芸」を開催(於国際文化会館) *写真③

「江戸の花プロジェクト・未来につなぐ朝顔文化～歴史と鑑賞～」を開催

(於日比谷図書文化館) *写真④

『花あかりともして』(株出版ワークス刊)の資料提供と監修を担当 *写真⑤

内閣府より褒章条例に基づく公益団体として認定される

二〇二八 平成30年 「新年賀詞交歓会」を「新春会員交流会」に名称・内容を一新 *写真⑥

協会誌『園芸文化』を20年ぶりに復刊 *写真⑦

日比谷公園第一花壇と新宿御苑内の花壇監修を開始 *写真⑧・⑨・⑩

「江戸の花プロジェクト・未来につなぐ朝顔文化SEASON2」を開催(於日比谷図書文化館)

二〇一九 令和元年 創立75周年を迎える

『月刊グリーン情報』(株グリーン情報刊)の連載「TARAYOU(多羅葉)」が通回70回に

浜名湖花博15年目の春・特別展示「江戸から令和へつなぐ花文化」を担当 *写真⑪・⑫

「江戸の花プロジェクト・未来につなぐ朝顔文化SEASON3」を開催(於日比谷図書文化館)

創立75周年記念事業「音で紡ぐ 花ものがたり」、「園芸と演芸の競演会」を相次いで開催

二〇二〇 令和2年 「創立75周年記念講演・園芸文化を支えた花たち」を開催 *写真⑬

「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」の発令に伴い、事業の中止が相次ぐ

「新宿御苑菊花展観菊会2020」を開催

『園芸道具 選び方・使い方の「コツ」の科学』(株講談社刊)を著作 *写真⑭



⑭園芸文化協会・著



⑤『花あかりともして』
第二次世界大戦中の「花禁
止令」や京都空爆など、知
られざる逸話が描かれる
(服部千春・著 紅木春・絵)
(株)出版ワークス刊



⑩新宿御苑内の円形花壇(2018年)
来園者の憩いの場としても人気



⑨奥峰子氏を囲むボラン
ティアの方々(霞花壇にて)



⑧日比谷公園第一花壇。園芸文化協会
(奥峰子氏)監修の唐草模様花壇(2018年)



⑥新春会員交流会
会場内で行われた頒布会の様子



⑩シンボルブロムナード公園・おもてなしガーデン（情熱のローズガーデン）ボランティアと一緒に作る花壇



⑮臨海副都心のシンボルブロムナード公園・おもてなしガーデン（情熱のローズガーデン）色でゾーニングされた花壇



⑫浜名湖花博・15年目の春展示に合わせて講習会を開催（浜名湖ガーデンパーク）



⑪浜名湖花博・15年目の春「江戸から令和へつなぐ花文化」（浜名湖ガーデンパーク）



⑬「創立75周年記念講演・園芸文化を支えた花たち」



⑰令和2年度・3年度 園芸文化賞表彰式（令和4年）写真は、令和2年度受賞の鳥居恒夫氏。プレゼンターは当時の会長・三好世紀氏



⑱小笠原前会長退任記念講演「江戸の園芸はおもしろい」。進行役の須磨佳津江さん（左）、特別講演の増田孝先生（右）とのトークセッション



②②荒川区立宮前公園 ナチュラルな雰囲気の「メドーガーデン」



②④4年ぶりの開催となった「フラワートライアルジャパン2023 秋日帰りバスツアー」。会場では担当者がガイドしてくれることもある

二〇二四 令和6年 創立80周年を迎える
八代目会長に長岡求氏が就任

*1926～2014年は2・3ページ

「都立日比谷公園再生整備計画」開始に伴い、日比谷公園バラ花壇・管理ボランティア「日比谷ローズ」の16年半の活動を終了 *写真⑳・㉑・㉒

二〇二三 令和5年 荒川区立宮前公園の花壇監修と
サポーター管理を開始 *写真㉓

「フラワートライアルジャパン2023 秋日帰りバスツアー」を4年ぶりに開催 *写真㉔



⑲『園芸文化』第130号 本号より、題字を『聖武天皇宸翰雑集（しんかんざっしゅう）』より採字 *写真⑲

二〇二二 令和3年 「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」継続。引き続き事業の中止や延期、縮小が相次ぐ
NHK BSプレミアム「秘密のイングリッシュガーデン」の植物監修
『月刊グリーン情報』（株グリーン情報刊）の13年半、通回85回の連載を終了
七代目会長に三好世紀氏が就任
シンボルブロムナード公園「おもてなしガーデンボランティア（情熱のローズガーデン）」の管理運営を開始（東京港埠頭との共同運営） *写真⑮・⑯
コロナ禍で延期していた「令和2年度・3年度園芸文化賞表彰式・記念講演」を開催 *写真⑰
小笠原前会長退任記念講演「江戸の園芸はおもしろい」を開催（於日比谷図書館） *写真⑱
協会誌『園芸文化』130号を発行 *写真⑲

日比谷ローズのおもいで



②③作業の様子



②③初期設計を担当した大野耕生氏による剪定指導の様子



②②バラ苗の植付（2007年）

令和六年度 園芸文化賞

ラナンキュラスとともに

有限会社綾園芸 前代表取締役社長

草野 修一

なぜラナンキュラスなのか

この度は大変栄誉ある園芸文化賞をいただき、この上ない幸せです。亡き父もきっと喜んでいてはないかと思えます。

私の父は富山県出身です。昭和のはじめに東京に出てきて原宿で書生をしていました。ある春の日「来客があるので一番きれいなと思った花を買って来るように」と言われて、渋谷駅近くの花屋さんに行き花を買って帰りました。それがラナンキュラスだったそうです。

その後昭和8年父は多摩川の温室村に見習いに入り昭和15年に自分で花栽培を始めました。見習いをしていたころに『実際園芸』（現・『農耕と園芸』）に出ていた日系人によるカリフォルニアでのラナンキュラスの大規模栽培に憧れて夢に見ていたそうです。

〈受賞理由〉
国の内外、切り花・鉢物を問わずラナンキュラスの品種育成の第一人者で、現在流通するラナンキュラスのおよそ6割の品種を氏が育成しているのに加え、新しい栽培技術の普及や産地形成にも貢献し、ラナンキュラスブームの先駆的な役割を果たした。また、近年作出の「ラックス」シリーズは、これまでになく光沢のある花弁が特徴である上に、丈夫で育てやすく、家庭園芸にも拡がりを見せるなどその影響力は大きく、園芸文化の向上と発展に大きく寄与した。

戦後、花栽培を再開していた父は、サカタのタネの創業者坂田武雄氏と巡り合い、夢にまで見たカリフォルニアのラナンキュラスを手に入れることができました。それから父はサカタのタネと連携してプリムラジュリアン、ポットガーベラ、ミニカーネーション、ラナンキュラス、シクラメン他多種類の育種を同時にやっていました。ある意味で変人と思われるような人でしたが、私は父を尊敬していました。

私は大学卒業後、父の勧めで義兄と共同で鉢花の栽培に取り組むことになりました。この時の生産の経験がいろいろな意味で、あとになって役に立ったと思います。バブル好景気のなかで12年が経って神奈川県が手狭になり、宮崎に新しい農場「綾園芸」を始めました。宮崎では鉢物生産・出荷を行うとともに、ラナンキュラスの切り花栽培もやることにしました。父から「切

り花ラナンキュラスはヨーロッパで大人気なのになぜ日本では売れないのだろうか？」という宿題を与えられていたからです。

F1品種をめざして

自分で切り花を栽培出荷してみても、売れない理由がわかってきました。そこで、父が持っていた系統の中から目的に近い株を選び、とにかく多量の組み合わせを試みF1品種の育成をめざしました。5〜6年ほど交配を繰り返して日本での栽培、販売に向く品種としてできたのが「エスピノシリーズ」です。〈写真1〉

ところがF1をめざしている過程で思わぬ形質の花が出てきました。たくさんの中間のパステルカラー、奇形花や倍数体と思うような個体などです。〈写真2〜5〉

「200年前のヨーロッパには800以上の品種があった」と文献にあるのですが、今ま



〈写真A〉ラナンキュラス試作圃場



草野 修一 氏



〈写真1〉F1品種エスピノシリーズ。早生多花性。花色豊富で現在も人気



〈写真2〉‘キティラ’ 明るいレモンイエロー大輪。ころんと丸い花姿



〈写真3〉‘オルレアン’ クリームピンクに濃桃のスポット。花色は濃淡変化



〈写真4〉‘ル・ピュイ’ 大きく波打つ繊細なフリル状花弁。華やかな桃色



〈写真5〉‘トリトン’ 緑花から出たボール状花。茶に近い濃ワインレッド

個性重視の栄養系品種



〈写真9〉‘アラクネ’



〈写真8〉‘モルヴァン’



〈写真7〉‘エムキンギョ’



〈写真6〉‘ロゼール’

ラナンキュラス ラックス シリーズ



〈写真13〉ラックス‘ガラテア’



〈写真12〉ラックス‘ティーバ’



〈写真11〉ラックス‘ピュタロス’



〈写真10〉ラックス‘アリアドネ’



〈写真17〉ラックス‘ヘステア’



〈写真16〉ラックス‘ジュピター’



〈写真15〉ラックス‘グレース’



〈写真14〉ラックス‘アウラ’

従来のラナンキュラスは大きい花が雨で傷みやすく、フラワーフェスタなどで何度も残念な思いをしていました。花壇用にシユーンという重ねの少ない品種を育種したものの、ラナンキュラスの花弁そのものが雨風に弱く、問題がありました。その後いろいろな原種をかけてみたりしましたが、見栄えのしないものばかりでした。

耐候性のラナンキュラス

その間にいくつかの幸運に恵まれ、1997年には場内に培養室を作っていました。当初は親株の増殖・維持が目的でしたが、それによって栄養系品種をスムーズに市場に供給でき、育種の方向性もF₁から栄養系に移っていきました。揃えることから個性を引き出すことに重点を置くようになったのです。〈写真6〜9〉

組織培養で个性的な品種を

での長い育種の歴史、特に揃いを重視した20世紀の育種において隠れてしまった遺伝子が表に出てきたと感じました。〈写真A〉



〈写真B〉球根養成圃場（ラックス‘アリアドネ’）

2004年頃、花びらがピカピカ輝く原種を入手しました。「この強い光沢がラナンキュラスの花に乗ったらどんな花になるだろう」と、交配してできた種間雑種がラックスです。今までにない輝く花びらとスプレー咲きの性質は常識を超えたものでした。〈写真10〜17〉

2012年オランダで開かれたフロリアードに出展しゴールドメダルを受賞しました。ちょうどその年、浜名湖ガーデンパークから「昨年から植えてあったラックスが今年も咲きました。宿根ラナンですよ！」と連絡がありました。あれほど花壇に向くラナンキュラスの育種に苦戦していたのに、その道が開けるとは本当に幸運でした。思わぬ神様のプレゼントを貰ったような不思議な気持ちでした。〈写真B・C〉

園芸の道に入って約半世紀、本当に多くの人に助けられ、育種のアドバイスをいただきました。皆様に心より感謝いたします。



〈写真C〉ラナンキュラスの宿根草花壇（宮崎市こどものくに）

令和六年度 園芸文化賞

ヒマワリの育種

元タキイ種苗株式会社・長野研究農場長

羽毛田 智明



羽毛田 智明 氏



花が真上を向き開花するサンリッチ UP(アップライト)。テーブルアレンジやブーケに最適



太陽 サンリッチの育成に関わった古い品種

関係の皆様へ感謝

この度は令和6年度の園芸文化賞を頂戴し、たいへんありがたく存じます。受賞に当たりご尽力頂きました協会の皆様を始めとする関係各位にまずはお礼申し上げます。

46回目を迎える園芸文化賞は、私が大学4年生の昭和52年度に始まりました。以来、大先輩の皆様が、それぞれの分野での功績により、この賞を受賞されました。私は若い頃からこの方々のご著書等を拝読し、何人かの方々には直接お話を伺い、数々のインスピレーションを受けて来ました。今回私が受賞の榮譽に浴することができたのは、こうした先人のお蔭でもあると深く感じております。また、私はタキイ種苗という土俵で45年間花卉類の育種を続けて来ましたが、曲がりなりにも育種が継続できたのは、学生時代から長くお世話になった千葉大学の故飯塚宗夫先生、タキイ種苗

＜受賞理由＞

タキイ種苗株式会社において、太陽のような明るいイメージをもつヒマワリに着目し、花壇用矮性ヒマワリの開発を皮切りに、「極早生ミニ種の「ビッグスマイル」、切花用ヒマワリ、無花粉で花もちが良く、栽培期間が短く周年出荷が可能な「サンリッチ」シリーズ等ヒマワリ概念を覆す品種を次々と世に送り出し、ヒマワリをあらゆる用途や場面で欠かすことのできない品目として国内外市場に定着させるなど、園芸文化の向上と発展に大きく寄与した。

で特にお世話になった伊藤秋夫さんのご指導にあると思います。お名前を挙げさせて頂きこの場をお借りし改めて感謝申し上げます。

不連続な品種の育成

私は、主に花壇用や切花用の一年草、また、宿根草、球根類を対象として育成を実践しました。育成に当たり常に心掛けてきたことは、「過去に育成された品種の延長線上にない品種を作る」ということです。品種育成は既存の品種を素材として使うことが多いので、全く延長線上にない品種作りは厳密には難しいのですが、できるだけ過去の品種とは不連続な品種を開発したいという思いで取り組んで来ました。

そのためには、まず新たな発想が必要ですが、同時に育種の実際においては素材がたいへん重要になります。幅広い素材を持つことが育種の武器となります。とりわけ野生種を育種プログラムに取り入れることは、難しさもある反面とても有効な手段となり得ますので、野生種の収集には力を入れました。一方で、既存の品種の中には育種の先人の思いと知恵が詰め込まれています。先人の賜物である育成品種を引き継ぎさらに発展させていくこともたいへん重要

ヒマワリの育種

タキイ種苗に入社した昭和53年（1978）頃、私は固定種というものは遺伝的に完全に固定しているものであるとの間違った理解をしていました。実際には植物の持つ性質によってはそうは言えず、また、さまざまな理由から遺伝的な幅を持たせある程度の雑駁性が保たれている品種もたくさん存在しています。このことにより、固定種の表現形質には幅が出ます。この事実をたいへん興味深く感じたことから私はヒマワリ育種の可能性を見出すことができた、と振り返って思います。

太陽という品種は、昭和44年（1969）に育成された古い品種ですが、私のヒマワリ育種は、先人が残したこの品種との出会いから始まります。タキイ種苗入社後間もない頃、この品種を身近に観察する機会を得て、固定種であるこの品種の持つ形態特性の幅や、開花習性に育種的な面白みを感じるようになりました。かつて私のヒマワリに対する印象は、プールサイドに咲く野暮な花であり、決して切花にして飾るよう

写真提供：タキイ種苗株式会社



〈写真上〉ゴッホ美術館（オランダ） ヴィンセント・ファン・ゴッホ没後125年祭に、ヒマワリ サンリッチ オレンジ 12万5000本を用いた巨大迷路が設営された

〈写真下〉ゴッホの自画像とサンリッチ



〈写真左〉シックなアンティークカラーをめざして育成したサンリッチ ライチ LD*



〈写真上〉サンリッチ ライチ LD*とサンリッチ マロン LD*のアレンジメント

LD* = 長日開花性の品種であることを示す

無花粉のメリット

通常のヒマワリは大量の花粉を放出しますが、無花粉の品種では卓や衣服が汚れません。また、花の中心の色が濃く、コントラストがくっきり目立ちます。テーブルアレンジやブーケ作りに最適です。



花粉あり

花粉なし
(サンリッチ オレンジ)

サンリッチヒマワリの第一号品種はサンリッチレモン（1990年発表）ですが、この品種はオレンジ色（サンリッチオレンジ）を育成中に、劣勢色の鮮明なレモン色が出現し、これをオレンジ色にさきがけF₁化したものです。私にとって思い出深い品種です。

ヒマワリは通常、斜上咲きですが、時折真上を向いて咲く個体が出現することは兼ねてわかっていました。この特性を固定させた品種がサンリッチUP（2019年発表）です。ヒマワリと同じ頂花一輪咲きのガーベラは真上を向いて咲きます。真上を向いて咲くヒマワリがあれば、ガーベラが使われるテーブルアレンジメントなどの場面でも利用の可能性が広がります。水揚げがいいのはヒマワリの強みです。

ようなセンスを感じさせるものではありませんでした。しかし、実は切花として大きな可能性を秘めたものであることに気付きました。そして、この太陽や古い矮性品種を交配に使ったり、播種期を変えて栽培することにより開花特性を確かめたりしながら育成を進めました。花粉が出ない性質も取り込みました。

鮮やかな花色が定番のヒマワリですが、ルドベキアなど北米原産のキク科植物特有の茶系等のアンティークカラーを切花品種に取り込む狙いで育成した品種がサンリッチライチLD*（2021年発表）やサンリッチマロンLD*（2022年発表）です。品種育成に時間がかかりましたが、その後を引き継いだ後輩ブリーダーの努力により長年抱き続けたアンティークでシックな花色を切花ヒマワリで実現することができました。



〈写真上〉第32回ベストファーザー・イェローリボン賞（2013）授賞式会場を埋め尽くしたヒマワリ サンリッチ

〈下背景写真〉メキシコの切花栽培風景

最後に

これらの品種は、日本各地や海外ではオランダやメキシコなどで大規模な切花生産がなされています。

オランダのゴッホ美術館のゴッホ没後125年祭にサンリッチヒマワリを飾れたことや、父の日の花としてヒマワリが定着したことなどは、ヒマワリが広く普及したことへの傍証としてたいへんうれしく思います。喜びの時も、また、悲しみの時でさえ、この花が心に残る花として人々に愛され続けることを願っています。

今回園芸文化賞を受賞されたラナンキュラスの草野さんは私の学生時代の同級生であり、その草野さんと同時受賞できたことは尚一層の喜びです。末筆ながら草野さんに改めてお祝いの言葉をお送りしたいと思います。

令和六年度 園芸文化賞

園芸文化賞を受賞して

公益社団法人日本家庭園芸普及協会・前会長
メネデル株式会社代表取締役会長

羽田 光一

家庭園芸普及のための活動

この度は、「園芸文化賞」受賞という身に余る荣誉に浴し、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

どう考えても私がいただく賞では無いなというのが正直な気持ちですが、受賞理由のほとんどが「公益社団法人日本家庭園芸普及協会」のメンバーとしての活動に関するものでしたので、これは協会に代わって私がいただいたと解釈してお受けした次第です。このような事情ですが、折角の機会をいただきましたので、「日本家庭園芸普及協会」の一員として今日までやってまいりました家庭園芸普及活動について、また今後の活動について少しPRをさせていただきたいと思えます。

皆様ご承知の通り、我が国の一般市民の楽しみとしての園芸は江戸時代から既に盛んで、いろいろな園芸植物が育てられ、愛でられて参りました。例えば東洋ランや菊など、古くから全国各地に組織があり活動が盛んです。しかし、これらの多くは同好の士が集まった会であり、外に向けての発信は十分ではなかったかもしれません。そこで、家庭園芸に関する種々の情報を

＜受賞理由＞
長年にわたり日本家庭園芸普及協会の役員を務め、「日本フラワー&ガーデンショウ」を国内最大級の園芸パブリックショウに発展させたとともに、現在1万人を超える認定者が活躍するグリーンアドバイザー認定制度の拡充に尽力してきた。また、東日本大震災の復興支援を通して「たねダンゴ®」の普及やグリーンアドバイザーの活躍の場の創出にも努め、広く一般に植物への興味関心を促すなど、園芸文化の向上と発展に大きく寄与した。

日本フラワー&ガーデンショウ

私もこの展示を担当した委員会メンバーの一人として参加し、花博の楽屋裏を経験させていただき、非常に勉強になりました。

また、1991年3月には千葉幕張メッセにおいて花と緑のパブリックショウ「第一回日本フラワー&ガーデンショウ」を開催し、3万人規模の集客に成功しました。本ショウは、前年開催の大阪花博出展で得た知見を活かし、花と緑の利用法を紹介し、また花博に園芸売店を出店した経験も踏まえて、販売にも力を入れました。この経験が、この後続いた本ショウの「見て、触って、買えるイベント」の充実につながった

外部に発信し、家庭園芸のさらなる普及啓発を図る方策を打ち出そうという試みが「日本家庭園芸普及協会」の結成となったわけです。
当協会は1984年に任意団体として発足し、1988年9月に農林水産省及び建設省（国土交通省）の両省共管で社団法人の設立許可をいただきました。
1988年10月に開催した社団法人の設立披露パーティーは、両省大臣をはじめ多くの来賓のご参加をいただき、300名を超える大盛会となりました。大阪花博開催を前にしての当協会に対する期待の大きさに大変驚いた記憶が鮮明に残っております。
協会結成時から掲げておりますスローガンが「すべてのベランダ・窓辺に花と緑を。そしてオフィスにも。」というもので、家庭における園芸だけではなく、職場にも街にも花と緑をとということで、都市緑化をも含めた園芸普及を目指しており、この辺りが両省共管のメリットの一つかなと考えています。

設立から2年後の1990年の大阪花博では、政府出展の一部を担当させていただきました。全会期26週にわたって政府苑都市・環境館の一部でベランダ園芸をテーマとした展示を行いました。



宮城県仙台市復興支援活動（2011年8月31日）



（公社）日本家庭園芸普及協会の
設立披露パーティー（1988年10月）



羽田 光一 氏



第20回 2010日本フラワー&ガーデンショウ
（2010年3月 千葉・幕張メッセ国際展示場）

と考えています。

本シヨウは、幕張から東京ビッグサイト、そして近年はパシフィコ横浜と会場を移して毎年開催してまいりましたが、2011年には東日本大震災が開催2週間前に発生し、開催中止を余儀なくされました。

しかし、その後は花と緑を使った被災地での復興支援活動に注力し、花と緑がもたらす大きな力と大規模災害を前にした人間の無力さの双方を実感した次第です。

以後、本シヨウは2012年から2019年まで毎年開催して参りましたが、コロナ禍の発生により2020年は中止となり、2021年〜2023年までは規模を縮小して横浜市役所アトリウムで開催。本年からは開催主体の大幅な見直しを行い、この5月には5年ぶりの大規模な開催にこぎつけ、「横浜フラワー&ガーデンフェスティバル2024」として3万5千名を超える来場者を迎えることが出来ました。3年後に予定されている2027年国際園芸博覧会（以下、横浜園芸博）へ向けて、本シヨウのさらなる充実を図ってまいりたいと考えているところです。

グリーンアドバイザーの役割

さて、パブリックシヨウと並んで、協会事業のもう一本の柱が「グリーンアドバイザー認定制度」です。この事業は当協会が任意団体の頃から制度創設の準備を進めてきたもので、1992年第一回の認定講習・試験を東京、大阪の2会場で実施し、208名の登録者からスタートしました。

以後、コロナ禍の2020年を除いて昨年まで計32回の認定講習・試験を実施し、

現在の登録者は1万名を超える規模となりました。また、北海道から九州まで全国13の「GAの会」が自主的に設立され、独自の普及・啓発活動を実施しています。

この資格制度創設は、「家庭園芸の健全な啓発や発展には、家庭園芸に関する幅広い知識や技術を持ち、園芸初心者に基礎的なことを指導できる人材が必要不可欠だ」との共通認識が協会メンバーにあったからです。

特に園芸店やホームセンターなどに勤務する方々が、消費者に対して指導や助言を行うにふさわしい資格として、グリーンアドバイザー資格が認識されています。

現在はオンラインでの講習や試験を実施し、全国から多くの人々がチャレンジしやすい環境を用意しています。また、園芸CPD（経験・活動をポイントとする継続教育制度）により、園芸ソムリエ、プラチナ、ゴールド、スーパーなど資格の多様化を図り、グリーンアドバイザーの能力開発を進める取り組みも行っています。



グリーンアドバイザー認定講習・試験



保育所で子供たちが「たねダンゴ®」作り

「たねダンゴ®」で花壇作り

当協会ではこれ以外にも多くの事業を会員による活動を中核に実施しています。近年特に力を入れているのが、当協会が開発した「たねダンゴ®」普及活動です。

これは、東日本大震災後の東北での「花と緑の復興支援活動」の中から生まれた花壇作りの技法です。最初は保育園の園庭で子供たちと一緒に花を育てる活動の中で、子供たちは小さな種を扱うのは難しいというところから始まりました。

実は当協会では「たねダンゴ®」という商標を10年近く前に取得しています。権利の防衛というよりは「たねダンゴ®」の技法を正しく伝え広めていくことが目的です。その商品区分には「球状の土に包まれた種子」という表現がありますが、簡単に言えば、「ケト土と赤玉で作った団子に肥料を入れ、表面に複数の一年草の種子を付けて地面に植える」という泥遊び的な楽しい発想から生まれたものです。

誰でも簡単にできるところがポイントで、大人から子供まで多くの人々が参加できる花壇作りです。植え付け時にはイペントとしても大いに盛り上がり、順番に咲き続ける花壇景観を作る栽培技法です。

東京五輪では、競技施設に近いお台場のシンボルプロムナード公園で、真夏に咲くサマーガーデンを提供しました。

現在でも、たねダンゴ®指導員養成セミナーを全国各地で実施し、自治体のイベントなどで、特に子供向けに多く活用されております。

2027年の横浜園芸博でも、この技法を取り入れた大規模ガーデンを計画しており、当協会挙げて取り組もうとしているところと、当面は横浜園芸博を一つの突破口として、家庭園芸の普及啓発に取り組んでいく所存ですが、園芸文化協会様をはじめ多くの関係団体様とのコラボレーションも更に深めていければと、勝手ながら考えております。

花と緑、園芸の公益性

当協会は、公益法人制度改革で2012年4月に公益社団法人となりましたが、その際「公益」を取るかどうかという難しい判断を迫られました。この時、「公益」に舵を切るきっかけとなったのは当時の内閣府の公益認定等委員会の池田守男委員長のメッセージが大きかったと、私は思っています。池田氏は、東日本大震災の直後の2011年4月に出されたメッセージの中で、「民による公益の増進という原点に立ち返り、今こそ日本のために率先して取り組んでほしい」と述べられました。

私は「何故、公益を取るのか？」と問われれば、「花や緑、園芸の重要性を国や行政にも認識してもらおうことが重要だから」と答えています。

以前に比べれば、花や緑の必要性を多くの人々が認識しだしているように感じますので、そこへの的確なアプローチを我々がやり続けられるかが重要だと考えています。

2027年国際園芸博覧会 (GREEN × EXPO 2027)

～幸せを創る明日の風景～

Scenery of the future for Happiness

公益社団法人 2027年国際園芸博覧会協会 機運醸成部



公式マスコットキャラクター 「トゥンクトゥンク」に決定

開催 1000 日前となる 2024 年 6 月 22 日、マスコットキャラクター名前決定の記者発表会を行いました。

名前は、一般公募 6,076 件の中から、北原やえさんの作品「トゥンクトゥンク」に決定！ 公式アンバサダー芦田愛菜さんから発表されました。「トゥンク」というのは心臓の音を表しています。心臓の音は胸に耳をあてないと聞こえないことから、「地球の声に耳を傾けよう、そしてみんなで手を取り合いつながって、たくさんの命あるものがときめくような、そんな地球になるように」といった思いが込められています。



芦田愛菜さんと
トゥンクトゥンク

GREEN × EXPO 2027 1000 日前イベントを開催

2024 年 6 月 22 日、23 日の 2 日間、横浜・みなとみらい 21 地区で開催 1000 日前イベントを実施しました。本イベントは、開催 1000 日前を契機に、国内外の多くの方に多様な参加、参画いただくこと、さらには共に「GREEN × EXPO 2027」を作り上げることを目指していくためのキックオフを目的に実施いたしました。

各会場では、花緑団体様をはじめとする多くの団体、企業様等のご支援を受け、ワークショップやステージイベント、パネル展示等さまざまなプログラムを用意し、大人から子供まで幅広い層に向けた PR で会場を盛り上げました。

今後も GREEN × EXPO 2027 のテーマである「幸せを創る明日の風景」をともに描き、創り上げていく未来へのアクションを発信していきます。



押し花アート体験の様子



2027年国際園芸博覧会
公式マスコットキャラクター
トゥンクトゥンク

概要

名称 2027年国際園芸博覧会
International Horticultural Expo
2027, Yokohama, Japan

会場 旧上瀬谷通信施設
(神奈川県 横浜市)

開催期間

2027 年 3 月 19 日
～ 2027 年 9 月 26 日

博覧会区域

約 100ha
(内、会場区域 80ha)
予想来場者数：1,500 万人
(地域連携や ICT 活用などの多様な参加形態を含む)

有料来場者数：1,000 万人以上

資金計画

会場建設費 320 億円
(財源:国、地方公共団体、民間による負担)
運営費 360 億円
(財源:入場料、営業権利金等)

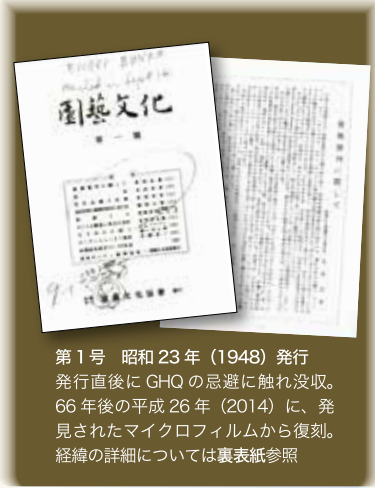
WEB サイト

<https://expo2027.yokohama.or.jp>



季節の花を
ふんだんに使用したステージ装飾





第1号 昭和23年(1948)発行
発行直後にGHQの忌避に触れ没収。
66年後の平成26年(2014)に、発
見されたマイクロフィルムから復刻。
経緯の詳細については裏表紙参照

天恵の気候風土と、植物を愛好する国民性により、我国の園芸は既に徳川時代から、優れた歩みを続け、サククラ、ツバキ、キク、ハナシヨウブ、ボタン、サクラソウ等の優良品種が数多く作出されて居るのは申すまでもなく、之に加うるに欧米から次々に導入された品種も独特の技術に依って、異常な発達を遂げて来て居り、世界の水準を凌駕するものも少なからず栽培されていたのであるが、それにも拘らず、之を統一して組織立て、科学的に進歩発達させ普及させる機関が全く欠けて居り、何等見るべきものがない状態であつて常に遺憾に思つていたのである。

自分は大正十年と昭和四年の二回渡英して約三年宛滞留していたが、その滞英中は幸い英国園芸協会(Royal Horticultural Society)の役員に推薦されていたので、審(び)さにその組織を知ることが出来たが、その規模が大きく内容の優れているのに驚異の眼を見はつた

事であつた。(中略)
勿論その規模は望むべくもないが、我国にもかかる組織を持つた機関が出来て、国内の園芸を組織立て、進歩向上普及に役立つ事が出来たならと深く感じた事であつた。

偶々昭和十八年の春に、林理事長を始め故石原、大澤、伴田の諸君や現在協会の役員をしている人々の間にこの計画が具体的に進められ、社団法人園芸文化協会の設立を見るに至つたが、その後の苛烈な戦禍や終戦後の世相から、未だ思はしい活動も致しかねているが、一歩一歩力強く理想に向つて進みつつあり、今後その一つの表れとして、会報が発刊される事になったのは、誠に斯界の為慶びに堪えぬ次第である。

資材その他に不自由な今日、理想的な創刊号が出せないのは残念であるが、会員各位も之を諒とされて、一、二、三号と更によりよき会報が続刊されてゆく様に、御協力の程をお願い申上る次第である。

(第一号巻頭 昭和二十三年発行)

プロフィール・しまづ ただしげ
(執筆当時 初代会長)
明治19年(1886) ~ 昭和43年(1968)、社団法人園芸文化協会初代会長。昭和19年(1944) ~ 昭和43年(1968)まで在任。

事務局より(協会案内)

公益社団法人 園芸文化協会は昭和19年(1944)に、園芸による文化の進展を目的に設立された園芸愛好団体です。今年創立80年を迎えました。園芸文化の普及と発展のためにさまざまな活動を行っています。

主な活動

- ①園芸セミナー(講座、見学会など)の開催
- ②協会報『園芸文化みんなの広場』、協会誌『園芸文化』の刊行
- ③功労者表彰(園芸文化賞)
- ④調査研究
- ⑤園芸活動への支援(講師紹介、審査員派遣、寄稿・監修、後援協賛、賞の交付 他)

会員特典

- ①当協会主催の園芸セミナー等に会員価格で参加できます。
- ②各種園芸イベント等の招待券や優待券を進呈します。
- ③協会報や各種園芸イベントの案内など役立つ情報をお届けします。
- ④園芸に関わる方々との交流の場を提供します。
- ⑤賛助企業より特別提供品を進呈します。(入会時、交流会参加時など)

会員種別と年会費

正会員(個人)	5,000円
*令和7年(2025)4月1日より8,000円になります。	
正会員(団体)	10,000円
賛助会員(企業等)	1口 20,000円~

- ・いつでも、どなたでも入会できます。
- ・会費の有効期限は納入日より3月31日までです。
- ・個人会員に限り、10月1日以降入会の場合、初年度のみ年会費が半額となります。

入会方法

「入会申込書」にご記入のうえ郵送またはFAXにてお送りいただくか、電話またはメールにて入会ご希望の旨を下記宛までご連絡ください。

手続方法や会員種別のこと、年会費の納入方法等についてご案内いたします。

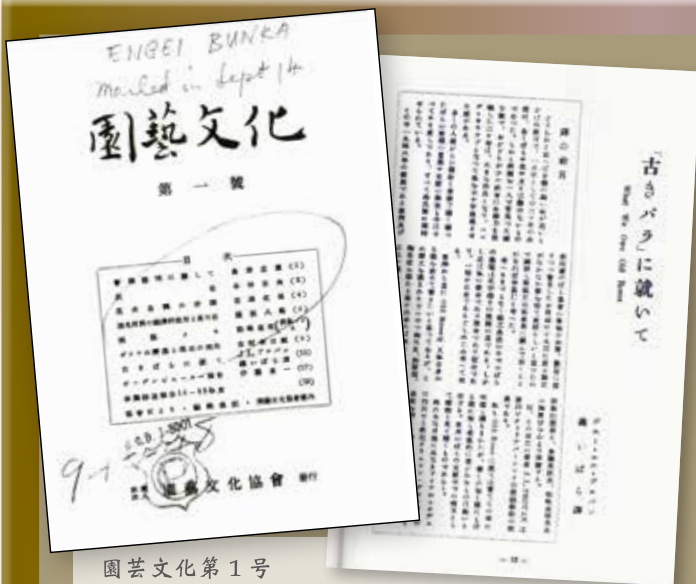
公益社団法人 園芸文化協会

〒113-0033
東京都文京区本郷1-20-7 安藤ビル202号室
電話:03-5803-6340 FAX:03-5803-6341
メール:enbun@soleil.ocn.ne.jp
URL:https://enbun.org

園芸文化の 歴史図書館

昭和19年(1944)、第二次世界大戦も末期という時期に創立された社団法人園芸文化協会。苛酷な時代にあっても理想と夢を諦めず、ここに80周年を迎えました。

これからも先輩諸氏に倣い、平和の象徴ともいえる園芸という文化を守り続け、新たな歴史を紡ぎ続けます



園芸文化第1号
昭和23年(1948)8月 社団法人園芸文化協会 発行

発行直後に、記事の一部がGHQの忌避に触れて没収。その後、この第1号から第8号までが欠本となっており、八方手を尽くしても見つからないまま幻のようになっていた。

ところが、当時の会長・保坂三蔵氏が国会図書館に相談したところ、思わぬところから「第1号」の存在が判明。アメリカのメーランド大学図書館に、日本の雑誌および諸雑誌関連文書が所蔵されたコレクション(ゴードン・W・ブランゲ コレクション)があり、これを日本の国会図書館と共同でマイクロフィルム化した中に『園芸文化第1号』が保管されていたのである(表紙の書き込みはGHQによるものと思われる)。

早速マイクロフィルムのコピーを入手し、平成26年(2014年)、70周年記念事業として66年ぶりに復刻の運びとなった



日本の花

日本の花

昭和39年(1964)

誠文堂新光社発行 園芸文化協会監修

身近な日本原産植物を網羅。それぞれの栽培法や楽しみ方を、園芸界の錚々たる執筆陣が語る大型本



花卉園芸年鑑
昭和36年(1961)

～昭和41年(1966)

かつての協会役員からの遺贈。協会報『園芸文化』とは別に、学会で発表された研究や新技術、多岐に渡る各方面の情報、業界の動向等をまとめた年鑑を発行していたと分かる



園芸入門
花木と草花の鉢づくり

昭和49年(1974) 主婦の友社発行
協会役員の執筆による入門ガイド



園芸文化 No.133

2024年12月

編集発行：公益社団法人 園芸文化協会

発行責任者：長岡 求

編集：編集委員会

奥峰子、御巫由紀、南場浩一、丹羽理恵

事務局：〒113-0033

東京都文京区本郷1-20-7

安藤ビル202号室

TEL 03 (5803) 6340

FAX 03 (5803) 6341

E-mail: enbun@soleil.ocn.ne.jp

HP: https://enbun.org

* DTP デザイン / 中村奈保子 (ムルハウス)

* 写真提供 / 江尻宗一 奥峰子 草野修一
タキイ種苗株式会社 長岡求 公益社団法人
2027年国際園芸博覧会協会 公益社団法人
日本家庭園芸普及協会 丹羽理恵 羽田智明
みどりの図書館 東京グリーンアーカイブス
(五十音順)

*無断転載・複製・複写(コピー)を禁じます